

第4段階：ガリラヤにおける大宣教

G. ガリラヤへの第二の旅

＝巡回の後半で弟子たちを祈りに招く

デイリー・ジーザス・ニュース #102

基本テキスト: MT 9.35-38 (並行テキスト: MK 6.6B)

35^{マタイ 35} イエスは引き続きすべての町や村を巡り、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気や苦しみを癒しました。

36 イエスは群衆を見て、彼らが羊飼いのいない羊のように打ちのめされ、無力になっているのを見て、深く憐れまれた。37 そこで、弟子たちに言われた。

「収穫は豊かだが、働き手が少ない。38だから、私はあなた方に命じる。収穫の主に祈り、収穫の畑に働き手を送ってくださるようお願いなさい。」

=====

注: 私たちは「混合テキスト」の原典福音書を次のように上付き文字で識別します: マタイ = ^{MT}、マーク = ^M、ルカ = ^L、ヨハネ = ^J、使徒行伝 = ^A。この「上付きID」は引用文の冒頭に挿入され、別の上付き文字が現れるまでその聖書書を識別します。さらに、*イエスの言葉は赤字で斜体で書かれています*。旧約聖書からの引用は大文字で書かれています。

コンテキストダイジェスト	
位置	ガリラヤの町と村
タイムライン	2ツア終了時)
イエスの生涯の文脈	第4段階：ガリラヤにおける大宣教
	G. 第2回ガリラヤ巡礼
タイトル	＝巡回の後半で弟子たちに祈りを呼びかけます

コメント：

ナザレの人々の不信仰に驚いた後、イエスは弟子たちを率いて再び旅に出、ガリラヤのおよそ25の町や村を巡る2回目の巡回を完了しました。

ナザレでは信仰が薄かったため、イエスは多くの奇跡を行うことができませんでしたが、ガリラヤの他の町々ではそうではありませんでした。本書には、具体的な人数は明示されていないものの、大規模な癒しに関する記述がもう一つあります。イエスは第二巡回の間、「あらゆる病気や疾患」を癒しました。1日にわずか10人の肉体的な必要を満たしたと仮定すると、イエスはそれぞれの巡回で1000人以上を癒したと考えら

第4段階：ガリラヤにおける大宣教

G. ガリラヤへの第二の旅

れます。福音書全体に散在するイエスが次々と多くの人々を癒した様子を鑑みると、これは控えめな推定値であると思われます。

奇跡的な癒しの働きが続けられたことは、二度目の巡回旅行の間、群衆の多くがイエスに対して依然として好意的な態度をとっていたことを示しています。パリサイ人はイエスの名と評判を汚すための執拗なキャンペーンでイエスへの反対を煽り、それが効果を上げていました。しかし、多くの人々は癒しと解放のための超自然的な力を必要としており、依然として助けを求めてイエスのもとに集まっていました。

二巡回のこの時点で、イエスは弟子たちに重要な新たな戒めを与えました。収穫に働き手を送り出すために神に祈るようにと命じたのです。主は既に、これから始まる第三回、そして最後のガリラヤ巡回において、十二使徒を二人ずつ遣わすつもりでした。彼らを宣教に用いるための準備は、祈りから始まりました。それは、イエスが宣教を40日間の祈りと断食で始め、ガリラヤ巡回を始める前にも祈ったのと同じです (DJN # 55)。

の宣教において、祈りと説教は密接に結びついていました。主はこの命令を与えることによって、使徒たちに祈りと宣教のバランスを取った宣教スタイルで従うよう教えられました。1年後、ユダヤとペレアに派遣された70人の使徒たちにも、働き手のために祈るようにという同じ命令を与えました (ルカ10:1-3)。使徒たちはこの教訓をしっかりと学び、こう宣言しました。 **「 私たちは祈りと御言葉の宣教に専念します。 」** (使徒言行録6:4)

イエスはなぜ弟子たちが祈りを奉仕の基盤とすることをそれほどまでに気にかけたのでしょうか。私たちがよく理解すべき重要な理由がいくつかありました。第一に、イエスは永遠に父と心の交わりを保ち続けていたのです。文字通りです。永遠の昔、つまり天地創造と受肉以前において父と経験したのと同じ親密な交わりが、地上での人生においても、イエスの最も深い喜びと意味の源であり続けました。祈りという父の存在を意識することこそが、イエスの命そのものだったのです。

父とのこの交わりは、イエスの生涯におけるあらゆる外的な言葉と行いが、父が彼を通してその特別な方法で働くことを望まれるという確信から生じていなければならないことを意味しました。イエスは、自らの主導で何かをすることを断固として拒否しました。三位一体の神にとって、すべては祈りに始まり、祈りによって支えられています。なぜなら、それぞれの位格は、他の二人とあらゆることにおいて、切れ目のない一体性と調和をもって働くからです。ですから、信仰と祈りは、イエスの言行のすべてにおいて源泉でなければなりません。他に方法はあり得ませんでした。これは、イエス自身にとって真実であったように、弟子たちにとっても真実である必要がありました。

二つ目の理由は、弟子たちがナザレで過ごした日々の中で、不信仰がもたらす強烈な影響を目の当たりにしたばかりだったことです。彼らは、凡庸な信頼ではなく、揺るぎない信仰をもって奉仕する方法を学ぶ必要がありました。祈りこそが、この必要を叶える答えでした。

さらに、イエスは、ご自分に対する反対がますます強まることを知っていました。つまり、使徒たちは第3巡回旅行において、第2巡回旅行でイエスが対処したよりも厳しい環境に直面することになるということです。これから見ていくように、イエスは使徒たちを第3巡回旅行中に厳しい反対、さらには迫害にさえ対処できるよう特別に訓練しました。宣教において困難や反対を乗り越えるには、祈りが不可欠です。

第4段階：ガリラヤにおける大宣教

G. ガリラヤへの第二の旅

最後に、イエスは使徒たちに、御霊の力によってご自身のように生き、仕えるように教えられました。弟子たちの証しを通して、世界のあらゆる国々のあらゆる人々に福音を伝えるというイエスの究極の使命は、神の力によってのみ可能でした。それは、弟子たちの人間的な能力だけでは決して成し遂げられませんでした。祈りと信仰こそが、弟子たちがイエスのように御霊の力に満たされる唯一の方法だったのです。

ですから、第二回ガリラヤ巡回旅行の最後の数週間と数ヶ月は、収穫の畑で働く人々について共に祈るということ、イエスからの明確で切実な呼びかけが際立っていました。イエスは彼らに個人的に祈るように指示しながらも、十二使徒との日々の共同祈禱の時間において、働き手を求める祈りを執り成しの中心に据えられたに違いありません。この祈りの焦点は、十二使徒一人ひとりが、自分たちの祈りに対する答えは自分自身にあると悟る手段となりました。それは、彼らが福音を宣べ伝えるために、他の何物にも増して備えられたのです。

応用：

神の御業は常に祈りから始まり、祈りによって支えられ、力づけられ、そして神の御業に対する感謝と賛美の祈りによって完成されます。一方で、祈りと信仰の欠如が神の御業をどれほど制限してしまうかを考えると、心が痛みます。ヤコブは手紙の中で、**「あなたがたが持っていないのは、求めないからです」と書いています。**なんとも痛ましいことです。

神が本当に祈りに答えてくださると信じられないため、私たちは時々祈りをしないことがあります。不信仰によってイエスの働きを妨げたのは、ナザレの人々だけではなく。霊的な無力感と実りのなさに対する唯一の答えは、粘り強い祈りです。この真理は、イエスが弟子たちに、収穫に働く人々が加わるよう祈るようにと初めて命じた日と同じように、今日の私たちにも直接当てはまります。神の働きの進展を熱心に祈るとき、私たちは神のためにその働きに召されるのです。

あなたはイエスが教えられた通りに祈り、信じていますか？

ナザレから出てイエスに従い、より大きな奉仕を行うためには、何を調整する必要がありますか。